〔書　評〕

『国語副詞の史的研究』

濱田　敦
井手　至　著
塚原鉄雄

竹内美智子

「副詞」の研究には理論的にも実証的にも困難な問題が山積している。その分野で、周到な実証的手続きによる「副詞の史的研究」が慎重な理論的反省を基盤として行われ、『国語副詞の史的研究』という著書にまとめられたことは、今後の副詞研究に多くの恩恵を与えてくれるものである。

また、「跋文」によれば、本書成立の母体には、濱田、井手、塚原三氏の指導のもとに大阪市立大学大学院学生諸氏の参加した研究会があったという。このような研究会での討議の場に加わり、そこから多くのものを身をもって学んだであろう人々のことを思う時、研究者の育成あるいは共同研究という面からも、本書のもつ意義は大きいといえる。

まず、「目次」に従って本書の内容・構成を紹介していく。

①「やうやう」から「やっと」へ……濱田　敦
——語の意味の変化の一例として——
②「なかなかに」から「なかなか」へ……塚原　鉄雄
③「せめて」について……井手　至
④「あながち・に」……濱田　敦
⑤「なかなか」の史的展開……塚原　鉄雄
⑥部分否定と全面否定……塚原　鉄雄
——土左日記の「かならずしも」を契機にして——
⑦土左日記の「必ずしも」……塚原　鉄雄
⑧「しひて」……大槻美智子
⑨「もっとも」の語史……井手　至

本書は、右の四氏による九篇の論考を収めたものであるが、「跋文」および「資料」によれば、そのうちの②・③・④・⑤は、昭和二九年から三〇年にかけて刊行された『大阪市立大学国語学研究調査冊子　国語副詞の史的研究』第一冊—第三冊に発表された論考であり、第一期の研究会の成果といえるものである。⑥以下は、昭和五〇年代以降のもので、殊に⑧・⑨は、長い中断の後に復活した第二期の研究会の成果である。研究会に参加した人々は延べ三〇余人にのぼる由であるが、右の四氏は、その共同討議の結果をまとめる執筆担

当者という立場でこれらの論考を記述されたとある。従って各論考は、執筆者の個性を窺わせつつも基本線では一致しており、共同研究とよぶにふさわしいまとまりをもった著作となっている。

ところで、本書の巻頭に置かれた濱田敦氏の論考①は、これら諸研究の原点ともいうべきものである。そこでまず、この論考①について見ることにする。濱田氏はこの中で次のように言われる。

文法で普通に「副詞」と名づけられる一類の語は、洋の東西を問わず、極めて雑駁な内容をもつものであって、早く言えば、それは他のどの品詞にも属せしめることの出来ない語を収容する為に設けられた、ゴミ箱とでも言うべきものであり、「文法」なるものの本来担っている悲劇的な宿命を最も端的に暴露しているとさえ言えるところの、語の種類に外ならないのである。しかしそれは反面において、一つ一つが極めて数奇な経歴の持主である為に、音韻史の上からも、又意味変化という点から言っても、非常に興味ある問題をはらんでいるものが多く、その方面においては今後更に調査研究すべき広い分野が残されている。（二一頁）

副詞の性格や問題点についての、まことに含蓄のある指摘である。

このような、「副詞」の一語一語について、現代語での使われ方に辿り着くまでの経路を跡づけ、個々の語の意味変化の事情を明らかにするとともに、副詞あるいは言語一般における意味変化の様々な形式を探ることを、この論考①は目指している。

この論考①に示された基本線は、以下の総ての論考に受け継がれ一層の展開を見せているといえよう。

ある種の語（句）は、副詞的な用法をもった時点で副詞への道を辿りはじめる。そのこと自体が、語形・意味などの変遷のもっとも激しい領域に一歩を踏み入れたことになるのである。その意味で、副詞とよばれる語の変遷の諸相の中には、言語一般の変遷の縮図があるともいえるのではあるまいか。従って、このような一語一語の副詞の意味変化を跡づける調査研究は、様々な困難を伴うものであるけれども、言語研究一般にとっても重要な意義をもつ分野であり、これからも更に多くの語について行われる必要があると思う。

また、諸論考は、実際の調査・検討の手続きなどについても、基本的な点で共通している。そのことを、同じ濱田敦氏の論考④によって見ていくことにしたい。

一般に語の史的研究といえば、時代的に古い資料から新しい資料へと変遷の跡を辿るのが普通であるが、ここではそれと違い、まず対象として取り上げた副詞が現代語でどのように用いられているかについての検討が行われる。しかも、それに相当重点が置かれている。例えば、論考④が現代語の検討に全体の四〇％近い紙幅を割いていることからもそれが窺える。これが第一の特色といえよう。

これに続いて、現代語に至る変化の過程が、時代の流れに沿って調査・検討されるのである。

本書では、右のような手順に従って一つの副詞についての「史的研究」が行われるが、その過程では常に綿密な方法論的反省がなされる。また、個別的事象を通してより普遍的形式を求めるための方法の工夫も随所に見いだされる。これが第二の特色といえよう。

この点を、論考④「あながち・に」の論述の流れに沿って具体的に示してみたい（紙幅の関係もあるので、範囲を「現代語について」の章に限る。☆は方法論的反省、★は普遍的形式を求める方法に関する箇所を

示す)。

☆或る語が現代口頭語で用いられているとしても、それは年齢・階級・性別等々を含めた広い意味での文体的な制約の下に於いてのみ「用いられている」という事が承認され得るに過ぎない。

☆我々自身の言語に対する内省という方法は、完全に習熟した言語にあっては、言語行為が無反省、無意識な状態で行われるものであるということから、一般に現代語研究の方法論として、実は最も不確実なやり方とも云えるものである。

(以上二項から、各種文体に亙る、内省によらない例文が資料として求められる)

★(「あながち」について)これは本来格助詞「に」(「と」についても略々同様の事が云えると思う)を介してはじめて副詞的修飾語たり得た名詞的乃至形容詞語幹的性格の語が、その意味、機能の変化に伴って——その多くの場合、情態副詞的なものが程度のそれを経て陳述副詞化するという方向をとる——「に」「と」を失うという、一般的現象として説明を与えられるべきものであろう。若し現代語で「あながちに」が用いられたとすれば、その「に」は古代語と違い、むしろ間投助詞的なものとしか考える事が出来ない。

★(現代語の「あながち」は「必ずしも」と云い換えられ、「あとに否定語を伴う」ものと認めた上で)「あながち」の現代語に於ける意味用法を分析し解明する為にはこの「必ずしも」を含めてその類義語の一群を採り上げ、それらとの張り合いに於いて考察する必要がある(下に否定語を伴って略々同じ型に属する「必ずしも、どうしても、ぜひ、きっと、別に、それほど、いつも、常に、強いて、無理に、たって、おして、まげて、敢えて」について次の基準により、相互間の差異が求められる)。

※「と云うわけでもない」などの否定語を伴うむすびの上部要素が次のどちらであるか。

(Ⅰ)用言・指定の助動詞を伴う用言相当の語のいずれを問わず而も連体形(終止形)命令形のいずれも立ち得るもの(「必ずしも君がわるいと云うわけではない」とも云えるし、「必ずしも君に行けと云うわけでもない」とも云い得る)

(Ⅱ)常に動詞に限られ、而も命令形のみが立ち得るもの(「ぜひ君に行けと云うわけでもない」と云い得るが、「ぜひ君がわるいと云うわけでもない」と云う事はまずない)

※否定語を伴うむすびの型として、

(a)「と云うわけでもない」の慣用句を要求するもの

(b)「のでもない」の簡単化した云い方の出来るもの

(c)「(わるく)もない」の様な云い換えが可能なもの

(d)「とは限らない」の様な云い方の出来るもの

のうちどれをとり得るか。

この両者は相関関係に立つものであって、(Ⅰ)型のものはむすび(a)(b)(c)(d)のいずれをもとり得るが、(Ⅱ)型のものはまず(a)のむすびしかとり得ず、(b)(c)(d)をむすびつける事は多くの場合不可能である。

これは、(Ⅱ)に属する副詞群が(Ⅰ)に属するものに比較してまだ多分に情態副詞的な色彩が濃く、従ってそれは下の打消のむすびと呼応すると云うよりも、むしろ専ら「云う」という動詞にかかるものとして理解すべきものだからであろう。(筆者注、この「云う」は「行け」と考えられないだろうか)。

※これらの副詞はその原義から次の四種に意味的に分類される。

(1) その動詞によって表される行為等の蓋然性が絶対的である事を意味するもの（「必ず・きっと」など）

(2) 行為の量が大である事を意味するもの（「特に」など）

(3) 時間的な意味での量の大きさを表すもの（「いつも」など）

(4) 障害を排除して行為する意味を表すもの

（イ）主として相手又は第三者の抵抗を押し切る意味のもの（「無理に・強いて・たって・おして・まげて」など）

（ロ）抵抗の有無に関せず、一般に悪条件（自分自身に関するものを含む）を押し切る意味のもの（「是非・どうしても」）

この中、(4)に属する語は大体に於いて(II)型に属する。

「あながち」は、現代語に於ける型から云えば(I)型に属するが、しかしその原義から見れば、(4)に属すべき語であった(以上の分析によって、現代語の「あながち」が陳述副詞的である事と、その原義が情態副詞的である事とを、「史的考察」でいかに跡づけるかという問題が提起されたことになる。現代語についての考察を重視するという本書の特色が、このように、「現代語の考察」と「史的考察」との有機的な関連となって結実している)。

※「あながち」とその云い換え語「必ずしも」との間に認められる主たる差異は、文体的乃至広義の方言(位相)上のものではないか。「必ずしも」はより論理的でありより重いのに比べて、「あながち」は情緒的でありより軽いと云える。用いられる階層も、一はより新しいジェネレーションに、一はより古いジェネレーションにと云った程度の差異が見られはしないだろうか（ここで冒頭の方法論的反省が実証的に生かされることになる)。

☆現代語では「あながち」や「必ずしも」などが、著しく「陳述副詞」化した結果、具体的な意味内容を伝える為に必ずしも必要でなくなり、特定の文体、例えば特に論理的である事を必要とする論文などを除いて、殊に話し言葉の世界から姿を消して行く傾向が強い。その結果として、下のむすびの担当する役割が重大となる（陳述副詞と述語部との関連の問題が提起されている)。

論考①・④におけるこのような研究の姿勢は、その他の論考にも共通しており、研究対象となる副詞の性格に応じて、それぞれ、理論的にも実証的にも注目すべき意見が展開されている。私は、本書を読むにあたっては、研究の結論よりも、それを導き出す過程に充分な注意を払うことが肝心であると思う。

残りの紙幅で他の論考を充分に紹介することが出来ないのは遺憾であるが、読み進む中で殊に心に残った二三の点を次に挙げる。

塚原鉄雄氏の論考②・⑤は、「『なかなかに』から『なかなか』へ」、「『なかなか』の史的展開」という、一連の研究である。塚原氏の論考は、殊に方法論的検証が緻密になされていると思う。その中の一つに、副詞の分類基準について次のような論がある。

世上、往々にして、情態副詞、程度副詞、そして陳述副詞の三者を、並列にすることがある。だが、前二者と後者とは、分類の基準が違うのだから、三つの概念を、同じ次元で扱うのは正しくない。《属性の副詞》に対する《陳述副詞》は、語の機能に基づく分類であり、情態といい、程度というのは、機能上の差異も加味してあるが、主として語の意義による命名である。とすれば、理論的には、陳述副詞にも情態副詞や程度副詞、または、これに準

ずる区分がなされてもよいわけである。（一九二頁）

既成の理論に安易に依り掛かることをされない氏の姿勢には、学ぶべきところが多い。

井手至氏の論考③「『せめて』について」にも、副詞の分類に関する新しい見解が見られる。井手氏は、「せめて」を「希望の対象たる事柄の叙述を修飾限定して、それが不本意（不十分）ではあるが、ぎり〳〵のところまずは最小限希望すべき事柄であることを示す機能をもった副詞である」とされた上で、

いわゆる陳述副詞といわれているものでも、たとえば、「おそらく」とか「きっと」の如きは、一定の叙述と呼応してそれを限定する点において、陳述副詞とはいえず、かえって、「せめて」と同じ叙述限定の機能をもった副詞だといえよう。（中略）このように、これらの副詞が、事柄のあり方に関する主体的な一種の限定を行うところには、一般の連用修飾（筆者注、情態副詞・程度副詞、即ち塚原氏の属性の副詞を指すか）と異なる点が存する。この意味で「せめて」の類を叙述限定の副詞と呼ぶことができよう。（九九頁）

と、「叙述限定の副詞」という種類を立てる意見を出された。「叙述限定の副詞」の中には、右の「一定の叙述を限定する『せめて』の類」の他に、「いかなる事柄も主体的に限定し得る『やはり・少くとも』の類」も含まれる。そして、「せめて」について、

現代語において、叙述を限定するという点において、右の「やはり」、「少くとも」の類の叙述限定の副詞と同一機能をもつといえるとともに、また、一定の叙述を要求し、それと呼応するという点において、一定の陳述を要求する「どうか」の如き陳述副詞と類似した機能を有する叙述限定の副詞ということができるのである。（一〇〇頁）

と述べておられる。

この他、史的考察の中にも、意味変化の形式に関する示唆に富む見解が数多く見られる。本書を読みながら、これらの箇所をメモすることで、私も今後の研究に役立つものを得たと思う。

塚原鉄雄氏の論考⑥・⑦は、土左日記の「かならず・しも――否定表現」の例について、古代語法としてのこの構文表現は全面否定の表現であり、部分否定の表現「かならず――しも否定表現」とは別種のものであることを詳論したものである。

第二期の研究会の成果である論考⑧・⑨のうち、大槻美智子氏の論考⑧は、「しひて」について、口語から文章語へ、和文脈での用語から漢文訓読の用語へと、用いられる場を変えたために、副詞らしい意味変化を遂げぬままに文語化した過程を詳述しておられる。

また、井手至氏の論考⑨では、現代語で副詞・形容動詞語幹の他に接続詞としても用いられる「もっとも」が取り上げられ、それらの用法の成立過程が解明されている。複雑に変化する副詞の姿を、また新しい面から捉えられた点で、今後の展開が期待される。

以上、繁簡よろしきを得ない紹介になったが、これからの言語研究において共同研究の占める割合と意義は、更に増大すると思われる。その時期に本書が刊行されたことは、学界にとっても、よい刺激になるものと思う（なお、敬語的表現は最小限にさせていただいた。御諒承いただきたい）。

（平成三年十一月二十五日発行　新典社刊　A5判　三一六頁　一〇〇〇〇円）

――共立女子短期大学教授――

（平成四年八月二十一日　受理）